「愛心深入」における女の因業

――『日本霊異記』中巻第四十一縁――

大塚　千紗子

はじめに

『日本霊異記』（以下『霊異記』）中巻第四十一縁（以下、本縁）は、蛇と人間の娘との異類婚姻譚を語る。河内国の裕福な家の娘が蛇に犯され、蛇の子を身籠もるが、薬師の治癒によって蛇の子の堕胎に成功して意識を取り戻す。しかし娘は三年後、再び蛇と姦通する。その際に、本文では娘の状態を「愛心深く入りて、死に別るる時に、夫と妻と父母と子とに恋ひて」と描写され、その娘は「我れ死なば、またの世にかならずまた相はむ」との遺言を家族に残して死ぬ。その後、「経に説きたまふが如し」（出典は特定されていない）として、母と息子の近親相姦と、狐に転生した息子の、二つの説話を載せる。

以下に、対象とする本縁の全文を挙げる。[1]

女人大蛇に婚はれ薬の力に頼りて命を全くすること得る縁　第四十一

A（1）河内国更荒郡馬甘里に、富める家有り。家に女子有り。大炊天皇の世の天平宝字三年己亥の夏四月に、其の女子桑に登りて葉を揃く。時に大蛇有り。女の登る桑に纏りて登る。路往く人見て嬢に示す。嬢見て驚き落つ。蛇また副ひて墮ち、纏りて婚ひ、慌迷ひて臥す。父母見て、薬師を請召ぶ。嬢蛇と倶に、同じき床に載せられ、家に帰り庭に置かる。稷の藁三束を焼き《三尺を束と成し三束とす》、湯に合せて汁を取ること三斗、煮煎て二斗と成、猪の毛十把を剋み末きて汁に合す。然うして当の嬢の頭と足とに橛を打ちて懸け釣り、口を開きて汁を入る。汁一斗入るれば、すなはち蛇放れ往き、殺して棄つ。蛇の子白く凝りて蝦蟆の子の如し。猪の毛蛇の子の身に立ちて、閻より出づること五升ばかりなり。口に二斗入るれば、蛇の子みな出づ。迷惑へる嬢すなはち醒めて言語ふ。二親問へば、答へていはく「我が意夢の如し。今醒めて本の如し」といふ。薬を服むこと是くの如し。何ぞ謹みて用ざらむ。A（2）然うして三年を経、彼の嬢また蛇に婚はれて死ぬ。『ア愛心深く入りて、死に別るる時に、夫と妻と父母と子とに恋ひて是の言を作していはく「我れ死なば、またの世にかならずまた相はむ」といふ。【愛心深入死別之時恋於夫妻及父母子而作是言我死復世必復相也】其の神識は、業の因縁に従

ひて、或るは蛇馬牛犬鳥等きらに生る。先の悪しき契に由りて、蛇に愛び婚はれ、或るは怪しき畜生にせらる。B愛欲一にあらず。』経に説きたまふが如し「昔仏と阿難と墓の辺より過ぐ。夫妻二人共に飲食を備け、墓を祠り慕ひ哭く。夫は母を恋ひて啼き、妻は嬰を詠ひて泣く。仏妻の哭くを聞きて音を出して嘆きたまふ。阿難白して言さく「何の因縁を以ちてか如来嘆きたまふ」とまうす。仏阿難に告げたまはく「是の女、先の世に一の男子を産み、イ深く愛心を結び、口に其の子の聞を嗛ひき。母三年を経て、儵倏に病を得、命終る時に臨みて、子を撫でて聞を唼ひて斯く言はく『我れ生々世々に、常に生れて相はむ』といひき。隣の家の女に生れ、終に子の妻と成り、自が夫の骨を祠りて、今慕ひ哭く。本末の事を知り、故に我れ哭くのみ」とのたまふ」とは、其れ斯れを謂ふなり。Cまた経に説きたまふが如し「昔人の児有り。其の身はなはだ軽く、疾く走ること飛ぶ鳥の如し。父常にウ重し愛びて守り育ふこと眼の如し。父子の軽きを見て譬へて言はく『善きかな、我が児、疾く走ること狐の如し』といふ。其の子命終りて、後に狐の身に生る。善き譬を願ふべし。悪しき譬を欲はざれ。かならず彼の報を得るが故なり」と。

本縁は三つの話で構成され、本稿では話の構成上からABCと分けたが、Aについては説明の便宜上A（1）A（2）に分けた。これまでの研究としては、三輪山説話との比較から論じられる傾向が強く、神であった蛇の畜生への零落、及び神話の形骸化などが指摘されてきた。[2] しかし、必ずしも本縁が異類婚姻（蛇婿入り）の型式を踏んで記されているとはいえない。また、Aの話は、薬師の薬によって娘が治癒するA（1）で話が完結するならば、標題の通り薬の効能を説く話と理解できる。しかし、A（2）以下、三年後再び蛇に犯されており、標題の枠内には収まらない内容となっている。

そこで、以下本稿では、死に際していう娘の「愛心深入」が「神識」と如何に連関するものであるのか、また、娘の発した「我が意夢の如し。今醒めて本の如し」とは物語上、どのような意味を持った言葉であるのか等の検討を通して、本縁を読み解いていきたい。

一、「愛心深入」における文脈の問題点

本縁は説話の文脈において不明瞭な点が見える。本稿で問題とする「愛心深入」に関わる部分なので、まずその点から検討する必要がある。それはA（2）の「愛心深入死別之時恋於夫妻及父母子而作是言我死復世必復相也」の部分だが、狩谷棭齋は『日本霊異記攷證』にて「恐有誤脱」と指摘する。[3] それは「愛心深入」という心情が誰の誰に対するものであるのかが、曖昧であることによる。娘の心情とみれば、「夫妻及父母子」が娘と関係する家族の中で誰を対象としたのか不明瞭なのである。以降、この文脈をめぐり各注釈書による様々な訓と文意の解釈が提示されてきた。[4]

現在では大別すると二種の解釈が行われている。まず、I「愛心深入」を蛇と通じた娘が抱いた、蛇に対する「愛心」と採る説として、以下があげられる。板橋倫行氏は「死別之時恋於

夫妻及父母子而」の箇所の「妻」を「蛇」に、「及」を「向」に改訂して、「夫の蛇を恋ひ、父母子に向ひて」と訓み、娘は蛇の妻として夫である蛇への「愛心」を、自身の両親に告げる意として解釈した。[5] また、古典集成は「愛心深く入りて、死に別るる時に、夫妻と父母子を恋ひて」と本文校訂をしない姿勢で訓読する。文意は「蛇と結ばれた夫婦仲と、父母となって宿した（蛇の）子を恋い慕うこと。」と示し、「夫婦及父母子」を蛇と娘が夫婦を意味すると同時に、（蛇の子の）父と母となり、子を成す、といった補読の上で解釈する。[6] このⅠ説は、本文を校訂する、もしくは補読を行うことで成立する解釈ともいえるため、些か疑問が残る。これに対して、Ⅱ人間の家族へ向ける愛情の心、と解する説がある。旧大系は注にて「死に別れる時は、人は夫や妻または父母子等肉親に愛著してこういうものだ。」と指摘する。[7] また、新大系が本文の「愛心深入（中略）愛欲一非」までを、「業因に関しての一般論が展開される。」と述べるように、後述する経典引用の説話と併せて解釈した。

以上、問題とした「愛心」以下の解釈を挙げたが、本稿においては「愛心深入死別之時」を、娘に対する叙述ととり、その「愛心」を「娘から蛇に向けた愛心」と解する。そして「死別之時」以下を、死に際してもなお愛（もしくは愛する人々）に執着する人間の心情と捉える。なぜなら、本縁は蛇との婚姻によって生じた傍線部ア「愛心深く入りて」[8] で「愛心」の問題を語り、そこで問題となる「愛心」を契機として、Bの話に見える傍線部イ「深く愛心を結び」という母親から実の息子に対する近親相姦の話が導き出される。両者は「愛心」によって共通し、それはCにおいても「重し愛びて」と、子を愛する父の話へと繋がっていく。このように、各々の過剰な「愛心」の発端として、娘の蛇への「愛心」が示されていると考える。このように文脈を理解し、定めた上で以下、内容の検討に入る。

二、『霊異記』の夢見

娘は、蛇との子が堕胎されたことで意識を取り戻しA(1)「我が意夢の如し。今醒めて本の如し」と両親に答える。そして「薬を服むこと是くの如し。何ぞ謹みて用ざらむ。」というように、薬の効能を示す。娘の「我が意夢の如し」とは、蛇と交わって以降の、娘の状態を指しているものと捉えられよう。

多田一臣氏は、娘を「巫女」に、神を「蛇」に当て嵌めて憑依と夢の関係を解き、[9]「夢の如し」を夢と現実が曖昧な状態として捉えている。しかし、『霊異記』内の夢の場面には、夢の中で霊異を知る話、夢の中の出来事が現実となる話、仏との感応を記す話などが認められ、[10] 娘の状態がはたして多田氏の述べる「夢とウツツのはざま」の状態であったのかは疑問が残る。以下に、『霊異記』内における夢の場面を通して本縁における娘の「夢の如し」について考えたい。

中巻第十三縁「愛欲を生じ吉祥天女の像に恋ひ、感応して奇しき表を示す縁」は、優婆塞が天女像に対して愛欲の念を起こし「優婆塞夢に見て、天女の像に婚ふ。」と、天女と性交をする夢を見る。天女像を見ると優婆塞のものであろう精液が像の裳裾に付着しており、吉祥天への信仰が奇瑞となって得られたことを証明する。下巻第十六縁「女人濫しく嫁ぎて子をして乳

に飢ゑしめて故に現報を得る縁」は、寂林という僧の夢の中に女が現れる。彼女は生前、自分の子を養育せず、複数の男と情交を重ねたことで罪の苦痛を受けていた。『霊異記』における夢の説話には、仏教者の夢に天女や畜生・罰を受けた人間などが入り込む話がある。そして罰を受けている人間は、自身の苦痛と罪の内容を仏教者に語って、救済を求めている。しかし、以下の二例は、それらとは異なる夢の話が描かれる。

①『霊異記』下巻第二十六縁

広虫女、宝亀七年六月の一日に、疾病の床に臥して、数の日を歴。故に七月の二十日に至りて、其の夫並に八の男子を呼集めて、夢に見る状を語りて言はく「閻羅王の闕に召されて、三種の夢を示さる。『一は、三宝の物を多く用て報さざる罪。二は、酒を沽りて多の水を加へて多の値を取る罪。三は、斗升斤を両種用て、他に与ふる時に七目を用、乞ひ徴る時に十二目を用て収る。此の罪に依りて汝を召す。現報を得べし。今汝に示すなり。』」といひて、夢の状を伝語りて、即日に死亡ぬ。

②『霊異記』下巻第三十八縁

また僧景戒夢に見る事。延暦七年戊辰の春三月の十七日乙丑の夜に、夢に見らく「景戒の身死にたる時に、薪を積みて死にたる身を焼く。爰に景戒の魂神、身を焼く辺に立ちて見れば、意の如くに焼けず。すなはち自づから楉を取り、焼かるる己が身を笨掌き串き挽して、返し焼く。先に焼ける他人を教へて言はく『我が如く能く焼け』といふ。景戒焼かるる己が身を見れば、脚と膝との節骨と臂と頭と、みな焼かれて断れ落つ。爰に景戒の神識、声を出して叫ぶ。側に有る人の耳に、口を当てて叫び、教へて遺言を語る。彼の語言の音、空しくして聞かれざれば、彼の人答へず。爰に景戒、惟ひ忖るらく『死にたる人の神は音無し。故に我が叫ぶ語の声、聞えざるなり』とおもふ」とみる。夢の答いまだ来らず。

まず、①は冥界説話である。病を患った広虫女は、冥界に赴き、そこで閻羅王から三種の夢を示される。[11] この広虫女は、借りた物を返さないことや、酒に水を混ぜて売ったこと、「斗升斤」を使い他人に与えた分量よりも多く物を乞うなど、虚偽によって利益を作る罪を働いていた。彼女は現世に戻るといったん死に、身体の上半身が牛になって蘇生してからまた死ぬ。この話は夢の中で自分の罪を閻羅王に教示されるため、『霊異記』の他の夢とは、性質が異なる。広虫女は夢を通して自分の罪を認識させられたといえる。また、臨死状態を「夢」に例える点は本縁とも通じるものである。

②は『霊異記』編者景戒の夢であり、二つの夢が語られる。一つは、沙弥鏡日から「諸教要集」と「本垢」とを与えられ、その夢の意味を景戒が夢解きによって分析するもの、二つ目の夢は、夢の中で景戒自身は死んでおり、自らの身が焼かれている様子を魂となって見る、といった奇妙な夢である。この箇所の「神識」という語は、『霊異記』内においては②と本縁との二例のみである。波線部の「魂神」と、傍線部の「神識」を新編全集本は「霊魂」と指摘して、「神識」、「魂神」と波線部「神」を「たましひ」と訓む。[12] この点に関しては三節にて後述す

るが、夢の中で景戒は自身の霊魂である「神識」（魂神）の遊離を体験する。①では、女は自分の罪を夢によって教示されて、現報を受ける。②は、景戒が自分の身に起る未来を「長き命を得むか、もしは高き官位を得むかとおもふ。」と予言する。①、②を通して見れば、『霊異記』の夢とは、仏との感応・邂逅の場であるほかにも、自身の、これまでの罪や行いを自覚させる効果があるようだ。ここで、本縁の場合、蛇と性交をして意識を失っていた間の状態を「夢の如し」と表す点に注目したい。夢の中の出来事を語る際は「夢に見て」や「夢に見らく」と前置きした後、夢の内実を記す。しかし、本縁は「夢の如し」とあるのみで、あくまでも娘の認識は「夢のようだった」のである。夢見の内実を本縁は記さない。娘のこうした認識はなぜ生じたのか。

その問題については②の景戒の夢と共通する「神識」という語が関係してくるのではないか。景戒の場合も、夢の中で、自分の死と対峙し、身体と魂（霊魂）の乖離に直面する。それは、現実でない夢の中だからこそ可能なものである。従って、己の「神識」を意識できると捉えられる。本縁は娘が死んだ後に「其の神識は、業の因縁に従ひて」とあり、「神識」はその個人の因縁に従って輪廻転生していくと記述される。そのため、夢を夢と認識しない娘の「神識」を探ることが必要となる。

そこで次に、娘の「神識」とはどのようなものであったのか検討する。

三、「神識」

本縁の「神識」を探るためには、景戒が考える「神識」が、いかなるものかを理解する必要がある。この「神識」であるが、『類聚名義抄』（観智院本）には「神」（法下　二オ）と「識」（法上　二十五ウ）の両者ともに、「タマシヒ」の訓が見られ、人間の霊魂の意と解される。本縁の「神識」は先述したように、下巻第三十八縁の「神識」と併せて、霊魂と解されるに留まる。しかし、下巻第三十八縁の、「魂神」「神識」「神」の全てが、魂の意を表すものならば、本縁において「魂神」「神」でなく「神識」の語を用いる点は重要視すべきである。娘の生命の内部に深く根ざした魂として、「神識」の役割と意味を考えるためには、従来の指摘では不十分である。従って、実際にこの「神識」の語がどのように理解され、使用されていたのか、同時代のテクストや仏典の事例を通して確認しておきたい。

③『続日本紀』元明天皇　和銅六年五月

若し歯縦心に及び、気力尪弱、筋骨衰耗して、神識迷ひ乱れ、また、久しく重き病に沈み、起居漸まず狂言を発し時務に益无き、此の如き類、心素を披き訴へ、田に帰りて命を養はむとせば、理に聴すべし。[13]

④『続日本紀』元正天皇　即位前紀

日本根子高瑞浄足姫天皇は、天渟中原瀛真人天皇の孫、日並知皇子尊の皇女なり。天皇、神識沈深にして言必ず典礼あり

③、④は『続日本紀』の記事である。③は郡領を恣意的に解任することを禁止する制で、郡領でも体調が悪く、神識が乱れている者は、郡領として勤まらないために国司はその任を解く

ことができるという。④は、天皇の気質を述べ、天皇の心は沈着にして思慮深いという。『続日本紀』の例は人間の気力・精神や、その人物の性格といった心・気質の状態や様子に対して「神識」が用いられ、『霊異記』の例とは性質が異なる。

続いて、仏典にみえる「神識」を確認したい。まず、辞書的な意味としては「有情の心識をいふ。これ身の根本なればなり」と、説明される。[14] 有情とは、生類全ての総称である。「神識」とは、③、④の『続日本紀』では、心や性質を意味していたが、仏教においては、人間の生命と感情に深く関わる語であるようだ。仏教の「神識」と『霊異記』のそれとが等しいと見るならば、仏典に見られる「神識」の検討が必要となろう。

以下に挙げる、大乗仏教の薬師如来に関する代表的な経典である『薬師琉璃光如来本願功徳経』（以下『薬師経』）には冥界での場面において「神識」の語が見える。

⑤『薬師経』経集部第十二巻

> 琰魔の使、其の神識を引いて、琰魔法王の前に至るを見る。然れども諸の有情には俱生神有つて其の所作に随つて若しは罪、若しは福、皆具さに之を書して盡く持して琰魔法王に授與す。爾の時、彼の王は其の人に推問して所作を計算し、其の罪福に随つて之れを所断す。時に彼の病人の親属・知識、若し能く彼れが為めに、世尊薬師琉璃光如来に帰依し諸の衆僧を請じて、此の経を轉経せしめ、七層の燈を然し五色の続命神旛を懸け著けよ。或は是の所に彼の識還ること有り。夢中に在るが如く明了に自ら見ん。或は七日、或は二十一日、或は三十五日、或は四十九日を経て、彼の識還る時、夢より覚むるが如く、皆自ら善不善の業、所得の果を憶知せん[15]

病人が琰魔法王の使いによって「神識」を引かれ、冥界の琰魔法王の前に召される。そこで、病人の「罪」や「福」を琰魔法王が審査し、その病人の処遇が決定される。この時、彼の家族等が薬師瑠璃光如来に帰依し功徳を行なえば、病人の「識」は身体に帰ってくることがあるという。そして、その「識」が戻った病人は琰魔法王との出来事と自身の善・不善を「夢より覚むるが如」くに覚えているというのである。しかし、「神識」が帰るとは、如何なる状態であったと当時の仏僧は理解していたのだろうか。『霊異記』下巻第三十八縁において、天皇へと転生したと描かれる善珠は、『薬師経』の注釈である『本願薬師経鈔』（以下『薬師経鈔』）を記し、この「神識」に関して次のように注釈を行っている。

⑥『薬師経鈔』

> 当に知るべし、此は是れ、薬師如来及び経の威力をもちて患人の第六意識見分の上に此の三種の行解・相分を起こすを得しむるを。一は琰魔王と為す。二は王使と為す。三は己身と為す。自らの神識を所依と為す。[16]

善珠は、実際に病人が冥界に行ったのではなく、「薬師如来及び経の威力」と、薬師如来の力によって、あたかも自分が冥界に居るかのように病人に見せているのだという。さらに、この箇所に関して津田博幸氏は以下のように述べている。

> 薬師如来と経の「威力」が病人の「第六意識見分」（本人が自覚できる意識・思考、認識主体）の上に、琰魔王・王

の使者・病人本人の三種の「行解」（対象を認識し理解する体験）と「相分」（認識される形相・様子）を現出させるのである。それは病人の「神識」を「所依」（よりどころ）とする（この場合はスクリーン上に映画が映るようなものだと考えればよいだろう）[17]。

津田氏は善珠の『薬師経鈔』の冥界の話と『霊異記』下巻第二十六縁が類似することを指摘した上で、両者を対比検討している。津田氏によれば『薬師経鈔』がいう「神識」は、実際に身体から離れているのではなく、薬師如来の力により、「神識」を通して琰魔法王とのやり取りを病人に見せているのである。『薬師経』が、「識」が帰ってきた病人は「神識」の上で見た状態を「夢より覚むるが如く」と記述する点は注目すべきである。それは以下にあげる『瑜伽論記』にも、夢と「神識」とが共通して説明されているからである。

⑦『瑜伽論記』巻第一上第五夢

上方妙色仏土の衆生は化夢を受けて乃ち悟ることを得。彼の仏、睡眠の中に於て諸の衆生の神識の興めに説法す。受化の識其の所應に随つて四果を成ずることを得。乃至独覚も亦た夢中に於て結跏趺坐して般涅槃す。菩薩の受決乃至成仏は皆夢中に於てす、と云云[18]

衆生は夢の中で化夢を受けて、悟りを得ることができ、仏は衆生の睡眠の中で諸々の衆生の「神識」のために説法をすると述べる。化夢を受けると、その識の応ずる所に従い、四果を得るのだという。「四果」とは小乗仏教においての悟りの段階を意味し、最終的には、修行の最終段階に達した阿羅漢、羅漢となりえる。『薬師経』も『瑜伽論記』も病人、もしくは衆生の夢の中で仏が衆生の神識に働きかけることが知られる。そして、仏に応じた者は四果を得ることができるのである。

しかし、その一方で気づかない衆生に関しては、『出曜経』が次のように記述している。

⑧『出曜経』親品部第二十六

「愚者は好んで、真仏の所説に遠離す。」とは聖人は世に所し、衆生に平等の大道を教誡すれども、愚者は意迷ひて神識を革め難し。或は如来を見たてまつりて目を掩ふ者、或は説法を聞いて耳を塞ぐ者、或は如来の行ける跡に輪相の地に在るを見て蹋壊する者あり。斯等の類は罪垢深固にして改更すべきこと難し。過去恒沙の諸仏世尊、説法を無余の境に終訖するも、然も衆生の類、愚に執すること積久にして甘露滋く降るも視ず、聞かず。形を捨て形を受け、生死に輪轉して出期有ること無し。斯は愚惑に由つて無明に纏はるゝが故なり[19]

先の例に見えた「神識」は仏教に帰依する場合であったが、「神識」を改心することの困難な例を『出曜経』では示している。そして、「罪垢深固」であるために、改めることが難しい。また、このような衆生は、生を輪廻し続け、解脱して悟りを得ることが出来ないという。

このように、「神識」とは仏典において霊魂という意味合いだけでなく、人間の認識作用とも深く関わるものである。善珠が『薬師経鈔』で指摘するように、「神識」を「第六識意識見分」として捉えるならば、「神識」は薬師如来の霊験により、衆生

が認識可能な意識である。

しかしながら、ここで本縁の娘の「神識」に立ち返ると、娘は目覚めたときに、「夢の如し」と述べる。その「夢の如し」とは、『薬師経鈔』と『瑜伽論記』を通して検討すると、救済への手立てとなる仏が娘の夢の中に現れていた、と考えることも可能なのではないか。薬師如来の説法を認識できなければ、衆生の「罪垢深固」なる「神識」は改善せずに輪廻し、転生を続ける。それと同様に、仏の説法を娘の「神識」は認識できなかった。それ故の「夢の如し」ではないか。

また、本縁は標題にあるように、「薬の力」を示すが、『霊異記』における、〈病者と薬効〉を描く説話と比べると、この娘がいかに特異であるのかが理解できる。[20] 武田比呂男氏は、本縁の娘に関して

薬師の調合した薬の力によっていったんは命を救われたかに見えても、ついには因果の網（「業の因縁」）から逃れられず再び蛇に犯されて死んでしまうのである。因果応報の網目にとらわれた結果であるからには、その〈やまひ〉を癒すためにはそうした因果を解き明かしうるもの＝仏教者が介在しなければならないということになる。[21]

と指摘する。『霊異記』における病者は、自身の病が己の宿業（罪）によることを認識し、信仰と功徳によって病の治癒という霊験を授かる。言い換えれば、病は、薬師如来への信仰がなければ、霊験を体験できないといえる。従って、娘の「神識」が改善されなかったことが、三年後再び蛇と交わる原因になったと考える。

「神識」が目覚めていればA（1）で本縁は終わるはずが、A（2）に続き、「神識」によって再び蛇と「愛婚」する結果となる。これは「神識」と、娘の「愛心深入」という心情が連関しているためだと考える。節を変えて「愛心」の内実を検討したい。

四、「愛心深入」の意味

『霊異記』には「愛」という語が散見されるが、特にここでは、本縁と類似する例を中心に検討するため、異性へと向けられる「愛心」と「愛欲」に絞り込み考察したい。[22]

⑨『霊異記』上巻第十三縁

卿の女、呪の力を被りて病愈え、すなはち東人に愛ぶる心を発して終に交通ぐ。親属東人を繫ぎ、閉め居ゑて摟樔ふ。女愛ぶる心に忍ぶること得ず、なほ哭き恋ひて其の辺を離れず。

御手代東人という男は、ある機会があって裕福な家の娘の病気を治す。娘は東人に対して「愛心」を持ち、東人と通じてしまう。娘の「愛心」は、病を治癒した東人への愛の心と解せる。己の「愛心」によって東人を恋い慕う様は、本縁の娘に通じるものである。

⑩『霊異記』下巻第十八縁

雨を避けて堂に入る。堂の裏狭少し。故に経師と女衆と同じき処に居る。爰に経師婬心熾に発り、嬢の背に踞りて裳を挙げて婚ふ。閑の間に入るに随ひ、手を携へて倶に死ぬ。ただし女口の漚を嚙み出して死ぬ。晰に知る、護法の形罰

することを。愛欲の火身と心とを燋すといへども、婬心に由りて穢しき行をせざれ。愚人の貪る所は、蛾の火に投くが如し。

この話は男女の異常な「愛欲」を語る内容である。ある写経師が女衆らと雨宿りをしていた堂で、女と交接をしようとする。しかし、堂内でこうした淫らな行為を行うことが仏の刑罰に触れないわけがない。結語において、罰当たりな行為は人間の愛欲から起こり、それは時に身の破滅をも引き起こすことを注意する。

『霊異記』上巻第十三縁の娘の「愛心」が、臨終に及んでも、強い「愛心」を述べる様は、娘の東人に対する執着の強さを表している。また、下巻第十八縁に見える「愛欲」は、淫猥な感情として排除すべきものと、結語で語られる。そもそも「愛」とは仏教に由来する言葉である。それは人間の根本的な欲望や欲求を指し、悟りを妨げ、迷いを生みだす愛着の感情であるため、景戒が結語に注意を喚起することは当然である。『霊異記』に通底する仏教思想が本縁の「愛心」とどのように関連するのか検討するため、「愛心」がいかに理解され、また、受容されてきたのか仏典における「愛心」の例をみていく。

⑪『仏本行集経』巻十三　挵術争婚品第十三の下

而して一時、其の長者の子、彼の工巧鉄師の女の、樓上に在りて窓内に面を現はし、外に向ひて観看るを見、彼の長者の子、是の女を見已りて、即ち愛心を生じぬ。彼の長者の子、私に心の中に、此の女を記し已りて、速に往きて家に帰り、其の父母に告げて、是の如き言を作せり、「某工巧の家に、一女有り、我が意に貧愛し、取りて妻と為さんと欲す。」[23]

⑫『成唯識論了義燈』巻第四本

師の云く、中有の初心と及び［中有の］本心とは是れ愛を起す心なり。本有の初心も亦爾なり。何を以てか知ることを得る。[24]

⑬『出曜経』巻第十八　雑品第十七の二

人、前に悪を為すも、善を以て之を滅すれば、世間の愛著は其の義の空なるを念ふ。「人、前に悪を為すも、善を以て之を滅すれば、世間の愛著に由る。彼の梵志の妻、悪を興して無害に向ふも皆愛心に由る。是の故に説かく、「人、前に悪を為すも、善を以て之を滅すれば、」と。「世間の愛著は、其の義の空なるを念ふ。」とは愛心深固なれば、三界に流転し、四生の分を受け、五道に廻趣す。皆愛著して捨離する能はざるに由る。[25]

⑭『出曜経』第五　愛品第二

凡そ地獄に在つて諸の苦悩を受くることは皆愛の病に由る。諸の殺生も亦愛に由りて、到さる。不與取・婬姦・妄語、十不善行も亦復是の如し。皆愛心に由つて、斯の諸悪を造る。（中略）「是に於て、比丘よ、畜生に生まるゝ者は諸の苦悩多し。比丘、当に知るべし。若しは衆生有りて、畜生に堕する者は冥きに生れ、冥きに長じ、冥きに無常となる。此等は何者か。是れ所謂地に入る蟄蟲なり。是れ皆前身の愛欲を貧楽せしに由り、身・口・意・の行、悪く、身壊れ、命終り、死して地中の蟄蟲と為りしなり。是を冥きに生れ、

冥きに長じ、冥きに命終と謂ふ。是を比丘よ、畜生は甚だ痛にして忍び難しと謂ふ。（中略）此の三悪趣は苦を受くること無量なり。斯は前身に愛心堅固にして、此の諸の苦を種えしなり。」と。是の故に佛は「愛は衆病の首なり。」と説きたまひしなり。

⑪で、長者の息子は工巧鉄師の娘に恋をし、息子は両親に、その娘を貪愛したことを告げる。この「貪愛」は好ましい対象に対する強い執着であるとされ、息子の「愛心」は貪愛という執着の心へと変化する。⑫の「愛を起す心」の説明において、死者は新たに生を受ける中有の期間、いわば四十九日の期間、その魂は肉体を離れて次に生を受けるまで彷徨う。その中有の間の初めの魂が初心で、中頃の魂を中心として、愛の心がおこるという。人間の輪廻転生と「愛心」とが深く関係することが理解できる。

また、⑬、⑭には、人間の生死と「愛心」との関係がさらに細かく説かれている。⑬では、人間が悪い行為を行う理由・原因には「愛」があるのだと説く。人が悪行をしても善行で滅ぼすことができれば、「愛著」という欲望に捕われず、執着するには至らない。「愛心」が「愛心深固」の状態になると三界に流転するのだという。衆生が生死を繰り返しながら輪廻する「欲界・色界・無色界」が三界である。そして衆生は、自分の行った善と悪の因果によって住む五つの場所、すなわち、天・人間・畜生・餓鬼・地獄の五つの世界を廻ることになる。衆生は愛著し、その執着を捨てられないため、三界を流転し続けるのだという。その人間の愛著によって様々な悪が生み出され、輪廻を繰り返し、生死の苦しみを再体験するのである。⑭は、「愛心」こそが様々な悪行の原因であると説く。衆生は前世において愛欲を貪ると「命終り、死して地中の蟄蟲と為りしなり」と、愛欲を貪ったものは地中の「蟄蟲」という、冬篭りする虫に生まれ変わるという。「愛心」が「堅固」であることに原因があり、衆生の起こす「愛心」によって悪行が生まれていく。⑬の「愛心深固」や⑭に見られる「愛心堅固」のような、過剰な「愛心」をもつ衆生は畜生に転生し、苦を受けるためにこうした「愛心」は避けるべきものだとされる。

『霊異記』における異性への「愛」や「愛心」は、愛の心を発端として、因を生み、自らに業をもたらすことが示される。己の心にある「愛心」が、己の身に影響を及ぼすのであり、すべては自己の心の問題なのである。それは仏典において顕著であった。特に『出曜経』の⑭の例では「愛心」が人間の起こす悪の根本的な原因に繋がると説かれている。このような仏典からの理解を得て本縁の「愛心」を考えると次のようになる。先に見た⑬「愛心深固」や⑭「愛心堅固」のような過剰な状態が、娘における「愛心深入」であった。その「愛心」ゆえに、諸悪を引き起こしてしまうといえる。娘の「神識」は「愛心」に強く絡み付き、愛執によって「蛇と愛び婚はれ、或るは怪しき畜生にせらる。」のである。[26]

「神識」は、善珠の指摘によれば、認識可能な第六意識と捉えられる。とすれば、「神識」が改善されないのは、娘の「愛心」という心的作用によるものであったと考えられる。「愛」という人間本来の感情・衝動・欲求が、「神識」と連関することで、

娘の因業に繋がっていくのである。娘の「神識」とその内部に深く絡み付く因果を表す言葉が、「愛心深入」であったのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『霊異記』内の表現を通して中巻第四十一縁の意義を考察した。娘の発した「夢の如し」とは、娘が自身の「神識」を改善することが出来なかったことを意味すると考える。唯識説を通せば、娘が「愛心深入」という心（識）の状態であり、その強い「愛心」によって自らの「神識」を改善し得なかったためである。夢見における、仏からの教えに気付かない娘の「神識」は、己の「愛心」によって生じる因縁を断ち切ることが出来なかった。

また、本縁の傍線部イや傍線部ウから本縁は「愛」による因業がテーマになっていると理解できる。Bの母は、前世における息子への深い「愛心」により、来世での逢瀬を希求し、輪廻を果たして息子と結ばれる。Bを通して娘の因業を考察すると「愛心」を持った娘と蛇は前世においても関係をもっており、「愛心」の業に搦め捕られた娘は、その生を流転し続けることを意味するといえる。それ故に三年後に再度、蛇と「愛婚」するのであろう。本縁がA（2）を語るのは、仏の説法を感得できずに、己の業を背負った娘の姿を語ることに『霊異記』の意図があったといえる。従って、輪廻を繰り返すことが娘の因業であり、業の内実には、「愛」という人間存在の根本である欲望と、その感情が深く根ざしていた。

これまで見てきたように、本縁のA、Bは異質な「愛心」ではあるが、Cの父の息子に対する「重愛」という家族の普遍的な愛に関しても、共通して人間が過剰に執着する心が因縁として根本にある。いわば、本縁は己の心に起こる愛を巡る業を問題として提言しているのであり、仏ですら救済し得ない愛業を抱いた女の姿を説くことが本縁の意義であったと考える。

注（1）『日本霊異記』の引用は、新日本古典文学大系30『日本霊異記』（出雲路修校注、岩波書店、一九九六年十二月）に拠る。以下同じ。ただし、改めた箇所がある。注（8）参照。

（2）『霊異記』中巻第四十一縁の主な先行研究としては以下が挙げられる。藤森賢一「蛇の恋」（『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』塙書房、一九七二年十二月）、黒沢幸三「古代伝承文学の意義」（『日本古代の伝承文学の研究』塙書房、一九七六年六月）、古橋信孝「愛欲の自覚」（古代文学研究叢書2『和文学の成立　奈良平安初期文学史論』若草書房、一九九八年十二月）、北郷聖「『日本霊異記』中巻第四十一縁をめぐって―陰陽五行の視点から―」（『解釈』第四十三巻、二〇〇三年六月）、青野美幸「『日本霊異記』にみる蛇像の変容―中巻第八縁、中巻第十二縁、中巻第四十一縁―」（『鳴尾説林』十三号、武庫川女子大学日本文学談話会、二〇〇六年二月）など。異類婚や三輪山神話の側面から論じられる傾向の中、永藤靖氏は、本縁の娘について個人における「性愛」の問題が描かれると指摘する点に首肯する。（永藤靖「三輪山説話の変貌―蛇神から妖怪へ―」（『日本霊異記の新研究』新典社、一九九六年四月）。永藤氏の見

解を踏まえ、さらに娘の文言とその心の有り様に注目すべきだと考える。

(3) 狩谷棭齋『日本霊異記攷證』(正宗敦夫ほか『狩谷棭齋全集』第二、日本古典全集、一九二六年一月)

(4) 本稿で本文に使用した新日本古典文学大系『日本霊異記』は、底本に真福寺本を使用するが、本縁は中巻の残る来迎院本、国会図書館本には残存しない話である。なお、真福寺本の模写孔版である『校注 真福寺本日本霊異記』(小泉道、訓点語学会編『訓点語と訓点資料』別刊第二、一九六二年)にて本縁の当該箇所を確認できる。

(5) 板橋倫行『日本霊異記』(春陽堂、一九二九年五月)。松浦貞俊『日本國現報善悪靈異記註釋』(大東文化大学東洋研究所叢書19、大東文化大学東洋研究所、一九七三年六月)。小泉道『日本霊異記』(新潮日本古典集成、新潮社、一九八四年五月)。

(6) 注(5)参照。

(7) 遠藤嘉基・春日和男『日本霊異記』(日本古典文学大系70、岩波書店、一九六七年三月)。多田一臣『日本霊異記』中(筑摩書房、一九九七年十二月)。

(8) 新大系本は「愛心」を「愛ぶる心深く入らば」と「愛心」を分けて訓読する。しかし、仏典に「愛心」の語が確認できる。また、本稿では四節にて娘の「愛心」を検討するために熟語として捉え、「愛心深く入りて」と改めた。なお、Bも「深く愛ぶる心を結び」(新大系)→「深く愛心を結び」(本稿)と改めた。

(9) 多田一臣「古代の夢」(小島孝之編『説話の界域』笠間書院、二〇〇六年七月)。

(10) 掲載説話以外の夢の場面は、中巻第十五縁/中巻第三十二縁/下巻第二十四縁があり、『霊異記』における夢については、榊原史子「『日本霊異記』と夢」(小峯和明・篠川賢編『日本霊異記を読む』吉川弘文館、二〇〇四年一月)の論がある。

(11) 原文「三種之夢」を説話内容から狩谷棭齋が「疑罪字」と指摘して以降、「三種の罪」と改める注釈書もある。

(12) 中田祝夫『日本霊異記』(新編日本古典全集、小学館、一九九五年九月)。下巻第三十八縁頭注。
また、真福寺本は、本縁の「神識」の「識」を「議」と取る。『古典全書』(武田祐吉)以降、注釈書は「識」に改める。下巻第三十八縁の「神識」に校異はないため本稿においても「識」と取る。

(13) 『続日本紀』の引用は③『続日本紀』1(新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年三月)、④『続日本紀』2(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九四年九月)による。

(14) 宇井伯壽『コンサイス佛教辞典』(大東出版社、一九三八年六月)。

(15) 以下より引用する仏典の訓読文は『国訳一切経』により、『大正蔵』における該当箇所を載せる。『薬師琉璃光如来本願功徳経』(『国訳一切経』経集部第十二巻)。(大正蔵一四—四〇七b~c)。

(16) 引用した善珠『本願薬師経鈔』(日本大蔵経第九巻一八一頁下段)の訓読文は津田博幸「『霊異』と仏典注釈」(古代文学会叢書Ⅳ『聖典と注釈 仏典注釈から見る古代』山口敦史編、武蔵野書院、二〇一一年十一月)を参考にした。

(17) 津田博幸「『霊異』と仏典注釈」(古代文学会叢書Ⅳ『聖典と注釈　仏典注釈から見る古代』山口敦史編、武蔵野書院、二〇一一年十一月)。

(18) 『瑜伽論記』(『国訳一切経』論疏部第九巻)(大正蔵四二―三二〇a)。

(19) 『出曜経』(『国訳一切経』本縁部第十一巻)(大正蔵四―七二九c)。

(20) 『霊異記』には薬師信仰の説話が多く散見される。下巻第十一縁(盲目の女が薬師仏の木造に祈願する)、下巻第十二縁(盲目の男が薬師寺の正面で千手観音に祈願する)、下巻第二十一縁(薬師寺の僧が盲目になり、金剛般若経を読経する)、下巻第三十四縁(大きな腫瘍を持つ女が薬師経と金剛般若経、観世音経を読経し、腫瘍が癒える)などのように薬師仏や観音への信仰をもって病者はその病を癒やすことになる。

(21) 武田比呂男「『日本霊異記』にあらわれた〈やまい〉」(大野順一先生古稀記念論文集刊行会編『日本文芸思潮史論叢』べりかん社、二〇〇一年三月)。

(22) 『霊異記』における「愛」の用例として①子から親への愛(上巻第二十四縁)②親から子への愛(上巻第十二縁/中巻第四十一縁/下巻第二十七縁)③異性への愛(上巻第三十一縁/中巻第三縁(二例)/中巻第十三縁(二例)/中巻第四十一縁(四例)/下巻第十六縁/下巻第十八縁/下巻第三十八縁)④慈愛・敬慕(上巻第十八縁/中巻序文/中巻第七縁)⑤地名(中巻第四縁/中巻第二十七縁)⑥その他(中巻第十九縁)がある。

(23) 『仏本行集経』(『国訳一切経』本縁部第三巻)(大正蔵三―七一三a)。

(24) 『成唯識論了義燈』(『国訳一切経』論疏部第十九巻)(大正蔵四三―七三五b)。

(25) 『出曜経』の引用は⑬『国訳一切経』(本縁部第十一巻)(大正蔵四―七〇四c)、⑭『国訳一切経』(本縁部第十一巻)(大正蔵四―六三六b～六三六c)による。

(26) 『霊異記』における「婚」の用例としては、「天皇后と大安殿に寐て婚合ひたまふ」(上巻第一縁)、「他の烏遇に来たりて婚ふ。今の夫に妧み婚ひ」(中巻第二縁)、「嬢の背に踞りて裳を挙げて婚ふ」(下巻第十八縁)が挙げられる。いずれの場合も一方的な「犯し」ではない。本縁において、娘と蛇との二度の姦通が「婚」の字によって表されている点からすれば、娘はただ蛇に犯されたのではなく、娘自身の「愛心」によって「愛婚」したと捉えることができる。

※本稿は二〇一一年古代文学会十二月例会(於共立女子大学)にて口頭発表したものです。席上の方々から多くのご意見を賜り、本稿に反映いたしました。厚く御礼申し上げます。